

Active Listening と Repetition の機能について

西澤 緑(関西学院大学大学院)

## 1. はじめに

Active Listening は、アメリカの心理学者 Carl Rogers (1960)の client-centered therapy に基づき Thomas Gordon (1970)により開発され、話を引き出す「効果的聞き方」として北米の心理学、教育学界だけでなく conflict management といったトレーニング・プログラムなど幅広い分野で実践されている。Active Listening の特徴は相手の発話の内容を繰り返すことである。

- (1) In an Active Listening, the receiver puts his understanding into his own words (code) and feeds it back for the sender's verification. The receiver *does not* send a message of his own—such as an evaluation, opinion, advice, logic, analysis, or question. He feeds back *only what he feels the sender's message meant*—nothing more, nothing less. (Gordon 1970:62)

言語学的には相手の発話を繰り返す repetition は主にあいづち研究の対象とされてきた。質問したり自分の意見を述べたりせずに「聞いている」ことを示すのがあいづち機能であり、このような repetition のあいづち機能が Active Listening に効果的に作用していると推察できる。本研究ではテレビのインタビュー場面において相手の発話を繰り返す repetition がどのように出現するかを観察して、Ferrara (1994a,b)の分析と対比しながらその機能を分析する。「聞く」という場面に現れる repetition を調べることによって、repetition のどのような機能が Active Listening に関与しているのかを考察する。

## 2. 先行研究

## 2.1 Back-channel (Yngve (1970)の用語) 及び日本語のあいづち研究

相手の発話を繰り返す repetition は Duncan and Fiske (1977,1985)の back-channel 研究及び堀口(1997), ザトラウスキー(1993), 水谷(1988)をはじめとして日本語のあいづち研究の対象となってきた。しかしながら研究者によってあいづちの定義そのものが違う上に、イントネーションが下降調か否か、言い換えをどこまで認めるか、repetition の出現が話し手の発話権内か否かといった判定が難しく、どの repetition をあいづちと認定するかは今も論議が分かれている。堀口(1997:42)はあいづちを「話し手が発話権を行使している間に、聞き手が話し手から送られた情報を共有したことを伝える表現」と定義し、上昇イントネーションを伴わない repetition にこの機能を認めている。

## 2.2 Tannen (1989)

Tannen は感謝祭ディナーの会話に出現した repetition を 8 機能に分類している。repetition の基本となる機能を 'metamessage of involvement' (1989:52)を伝えるものとし、

「会話に参加する」戦略として **repetition** を捉えた。本稿で取り上げる直前の発話の一部または全部の繰り返しを、Tannen は 'immediate allo-repetition' (1989:61) と呼んでいる。

### 2.3 Ferrara (1994a,b)

カウンセリング場面の会話分析を行い、セラピストによる繰り返しとクライアント(患者)による繰り返しの二つの **repetition** を提示し、それぞれ **mirroring** と **echoing** と名づけて機能を分析した。Active Listening はカウンセラーにも広く用いられている「聞く」テクニックであるので、Ferrara の会話例に Active Listening の実態を見ることができる。**mirroring, echoing** とともに上昇イントネーションを伴わないことが特徴である。堀口(1997)も上昇イントネーションの **repetition** をあいつち研究の対象から外しているが、イントネーションは **repetition** の機能の分類をする際に考慮すべき重要な要素だといえる。

## 3. データと分析方法

### 3.1 データ

CNN の Larry King Live (以下 LKL) という 1 時間番組を対象に分析を行った。この番組は、毎回 Larry King が 1 人または複数のゲストを招いてインタビューするものである。ニュース番組のインタビューと異なって対話という面が強く、また生番組であるが故に King とゲストの自発的発言を観察することができる。データとして 5 本のビデオと、**rush transcripts** を用いた。なお **transcripts** は実際にビデオを見て必要な修正を加えた。

3.2 上昇イントネーションを伴わない **immediate allo-repetition** に限って抽出を行った。その際、以下のような **repetition** は対象外とした。

➤ 'Stroke is a terrible word.' に対し 'Horrible word' と応答するような表現の言い換えの **repetition** は判定基準の設定が難しいので除外し、'You don't preach it.' に対する 'I don't preach it' のような代名詞を置き換えた **repetition** のみを対象とする。

➤ 以下のような **echo question** (Quirk *et al.* (1985:835-837) の用語) も検出されたが、物理的に聞き取れない、或いは意味が理解できないといった理由で相手に応答を求めるといふ機能が明確なので分析の対象から外す。

'I have heard.' ↓

'You have heard?' ↑

'Would you have another?' ↑

'Would I have another?' ↑

➤ 上昇イントネーションを伴う先行発話に対する応答の中で **repetition** が出現することもあるが、先行発話が応答を求めているものと区別するため、今回は対象外とする。

'Were you scared?' ↑

'I was scared.' ↓

'He got better all day, right?' ↑

'He got better all day.' ↓

'He made a hullabaloo over it?' ↑

'He made a hullabaloo.' ↓

- ▶ ゲスト同士の会話の中でも repetition は観察されたが、本稿では聞き役の King による repetition とゲストによる repetition を対比させるため、ゲスト同士の repetition はデータに含めないことにする。

### 3.3 「話し役」と「聞き役」

「話し手」である人が発話順番を譲ると「聞き手」になること、実際に発言しているにもかかわらず発話権を譲っていないと考えて「聞き手」と呼ぶ場合があることなど、「話し手」「聞き手」という用語は定義が一定ではない。本稿では発話権の問題を言及しないので、混同を避けるため「話し役」「聞き役」という表現を用いる。「聞き役」とは実際の発語数も少なく主に聞く側にまわっている人を指し、「聞き役」の発話内容は「話し役」の情報に関するものである。本稿で扱うのはインタビュー番組なので、「話し役」はゲストであり「聞き役」は King である。

## 4. Type 1 : あいづち型 repetition

### 4.1 あいづち型 repetition

Type 1 は King がゲストの発話の一部、または全部を繰り返す repetition で、13 例が観察された。repetition をあいづちとする研究者が共通して認めているタイプなので、あいづち型 repetition と呼ぶことにする。Tannen (1989 : 59-62) の分類では 'participatory listenership' 機能を持つ repetition である。

13 例中 10 例の King の発話の総語数は 6 語以下であった。これは King による repetition 後すぐにゲストに発話順番が移り、ゲストが話を続けていることを表す。Duncan and Fiske (1977, 1987), 堀口(1997) は、この現象を話し役の発話権内に起こる繰り返しと捉えている。King の repetition 後ゲストの発言が見られなかった例外 2 例は、repetition 後コマーシャルになったものである。King の発言は(3)に見られるようにオーバーラップする場合もある。注目すべきは、(2) (3) のようにゲストが再度繰り返すパターンが 13 例中 6 例に観察されたことである。

#### (2) 歌手 Donny Osmond が Donny & Marie Show について語る場面

Donny: Well, besides the Phantom, I don't want to look too far ahead in the future because I've committed five years to the "Donny & Marie Show."

King: Five years. ↘

Donny: Five Years. ↘ So that's my main focal point. (LKL Aug.27, 1999)

#### (3) 骨関節炎を患った Bruce Jenner が Viox という薬で回復したという話

Jenner: Everybody's got a cure. ↘

King: everybody's got a cure for arthritis. ↘

Jenner: Yes, everybody's got a cure. ↘

That is why I think really going to your doctor, taking a really very scientific approach to what you are trying to do, looking at all the options, .....

...(続く)

(LKL Aug.29,2000)

## 4.2 あいづち型 repetition の機能について

### 4.2.1 機能の曖昧性

(2)(3)のように King がゲストの発話を繰り返した後、ゲストは自分の話をさらに詳しく説明する傾向がある。上昇イントネーションの繰り返しは相手の応答を求めるという機能が明らかであるが、上昇イントネーションを伴わない repetition であっても応答があることが観察された。(3)の Jenner の‘Yes, everybody’s got a cure.’のように Yes が現れる場合もある。

このタイプの repetition を Ferrara (1994a,b)の mirroring と比較すると、mirroring ではセラピストがゆっくりと言葉を選ぶように繰り返すのに対し、King による repetition は先行発話にオーバーラップするか先行発話直後になされている。しかしながら、発話の順番が聞き役から話し役にすぐ移っている点、繰り返された情報が話し役に属するものである点に共通性が見られる。Ferrara (1994a,b)はセラピストの repetition 後、患者が話を続ける傾向に注目して、mirroring の機能を‘indirect request for elaboration’とした。

#### (4) “Rule” of Indirect Request for Elaboration — mirroring

If A makes a partial repetition (with downward intonation) of a statement B has made about a B-event, the repetition is heard as an indirect request for elaboration.

(Ferrara 1994a: 77)

Ferrara (1994a,b)が「間接的」と指摘しているように、上昇イントネーションの repetition と違って、相手の応答を求めているか否か、表面的に表れない点がこの repetition の特徴である。それ故に「聞いている」というあいづち機能以上に、説明要求、確認要求の実質的機能を担っているのではないかとあいづち研究者の論議の的となってきた。しかしながら実は、この repetition の曖昧性こそが Active Listening の効果をあげる鍵を握っていると考えられる。

(1) で示したように Active Listening を実行する上で重要な点は、聞き役が自分勝手な理解をしないようにするために、自分の理解が正しいかどうか相手に確認してもらうことである。従って repetition は ‘feed it back for the sender’s verification’ (Gordon 1970:62)の働きを担わなければならない。Active Listening の観点から考えると、repetition の目的は自分の理解があっているかどうかの確認要求であるといえるのである。

確認を要求する場合、3.2 で挙げたような‘Were you scared?’ ‘He got better all day, right?’ ‘He made a hullabaloo over it?’ のような表現も可能であるが、聞き役が話の真偽に疑いを持って説明或いは確認を求めていると話し役が受け取る可能性がある。Active Listening が質問を禁じているのも同様の理由による。聞き役の意図が確認要求であったとしても、その意図が表面に表れない点が repetition の機能の特異な点なのである。

上昇イントネーションを伴わない repetition を聞いて話し役がはっきり認識できることは、聞き役が自分の話に異論を唱えることなく「聞いてくれている」ことである。この「聞いている」ことを示すあいづち機能により、話し役が「聞いてもらっている」安心感を抱きさらに話をしようとする効果が生まれてくる。このように二つの機能を同時に行使できる repetition の曖昧性が、Active Listening を効果的にすると考える。Ferrara (1994a,b)は、mirroring をカウンセリングのストラテジーとして捉えているが、日常会話であいづちとし

て出現するあいづち型 **repetition** の機能をうまく利用したのが **Active Listening** であり、セラピストは **Active Listening** を戦略として用いていると説明できる。

#### 4.2.2 情報の共有

‘mhm’ や ‘yeah’ といったあいづちもあるので、これらのあいづちと **repetition** との機能の違いを明確にする必要がある。聞き役は自分が重要だと思う部分を繰り返すことによって、自分の理解を話し役に提示することができる。‘mhm’ などのあいづちと異なり **repetition** では内容が示されるため、聞き役の理解が違っていたらそれを訂正する機会を話し役が得るという利点がある。聞き役にとって利点は、話し役が訂正しなければ聞き役の理解が合っているという確認を「間接的」に得られることである。こうして情報が両者の間で共有される。(2) (3)のように、ゲストが再度同じ言葉を繰り返す現象は、情報の共有を確認し合っていることを実証している。**repetition** のもう一つの重要な機能は、堀口(1997:42)のあいづち定義にあるように「聞き手が話し手から送られた情報を共有したことを伝える」働きである。

#### 4.2.3 **repetition** の量

あいづちタイプの **repetition** で繰り返される部分は相手の発話の一部の繰り返しであることが多いと堀口(1997), Ferrara (1994a,b) は指摘している。Ferrara の **mirroring** では句の繰り返しだけで節や文は観察されていない。LKL では(3)のように文を繰り返す例が 2 例あった。しかしながら、文の総単語数は 6 語以下であり、長い文を繰り返すことはない。長い文をオウム返しにすると、何より話し役に発話の順番をすぐに返すことができない。その時点であいづち的機能すなわち「聞いている」ということを示す機能が消えてしまい、**repetition** のもう一つの機能である確認要求が顕著になり、先に論じたように話し役に疑惑を抱かせる可能性が出てくると考えられる。

### 5. Type2: 承認型 **repetition**

#### 5.1 承認型 **repetition**

Type2 の **repetition** はゲストによる **repetition** である。King の発話の一部または全部をゲストが繰り返した後、ゲストがそのまま話し続ける点があいづち型と異なる。このタイプは 28 例検出され、繰り返された語は 7 語以下の長さであった。そのうち 25 例が(5)に示すように、ゲストが先に話した内容を King が言い換えたり、要約したりした場合に出現している。残り 3 例は、(6)のように先行発話が King 自身の意見の提示した場合である。

(5) Donny Osmond が優等生的イメージを保つのにストレスを感じていたという話

Donny: Well, I tried to protect an image.

King: Donny the good boy. ↘

Donny : The good boy, ↘ the good kid, nothing's wrong with him.....(続く)

(LKL Aug. 27,1999)

(6) ABC キャスター Maher がパレスチナ問題を語っている場面

Maher: .....The term “occupied” refers to a country that used to be a country.

There was no Palestinian Arab country, ever.

King: There was a Palestine, though.

Maher: Palestine. Do you know that at the 1939 World's Fair, there was a Palestinian exhibit, it was Jewish, .....(続く) (LKL Jan.4, 2002)

## 5.2 承認型 repetition の機能について

### 5.2.1 聞き役の理解の提示

(5) のように King はそれまで聞いた話をもとに自分の理解を短い文、または単語や句、節で提示し、それに答える形でゲストが繰り返している。このパターンは、Ferrara (1994a,b) の echoing に類似している。(6) については、King の意見の提示に対する応答の中の repetition なので、区別して論じる必要がある。本稿では Ferrara の分析と対比するため、(5)のタイプのみ考察することにする。

### (7) 'Rule' of Emphatic Agreement — echoing

If B repeats (with downward intonation) a statement A has made about a B-event, then the repetition is heard as emphatic agreement. (Ferrara 1994a: 73)

Ferrara (1994a,b)は、それまで聞いていた患者の話をセラピストが要約した時に承認型の repetition が観察されたと報告している。相手の話の内容を繰り返すのが Active Listening であり、セラピストは Active Listening の技法を用いていると推察される。LKL でも、聞き役である King がそれまで聞いていた内容をもとに自分が重要だと思う点を提示した時にこのタイプの repetition が現れている。それはゲストの話の要約であり、言い換えであることが多い。次の例のようにゲストが King の提示を訂正することもある。

### (8) Jenner が関節炎を患うまでは、活動的な生活を送ったと話を聞いて

Jenner: Well, ah, you know, fortunately I have been healthy all my life and very active all my life, and have enjoyed and active lifestyle.

King: Gold medal in the decathlon, the Olympics. →

Jenner: Well, yeah, I've got those little things, Larry, but you know...and so for me, as I grow older, you know.....(続く) (LKL Aug.29, 2000)

Jenner の 'active life' を King はオリンピック選手だったことと結びつけ提示したが、Jenner はそれを 'those little things' としている。このようにゲストは、King の提示した内容を承認することもあれば、訂正することもある。よってゲストによる repetition は Ferrara (1994a,b) の指摘通り、提示された内容の承認であるといえる。Tannen (1989)も応答の中に取り入れられた repetition の機能に内容の承認があることを指摘しており、本稿では分析対象からはずした上昇イントネーションを伴う先行発話に対する応答の場合も含めて、応答に出現する repetition の機能を 'ratifying listenership' と呼んでいる。本稿ではこのタイプの repetition を承認型 repetition と呼ぶことにする。

聞き役が自分の理解を提示して確認を求めるというパターンは、4.2.1 で論じたものと同

様で、要約、言い換えが広義の **repetition** となっているといえる。King の発話が上昇イントネーションを含んでいない点に注目しておく必要がある。あいづち型 **repetition** 同様に、聞き役が重要だと思っている内容を提示することで、間接的に話し役の確認を求めていると考えられる。

### 5.2.2 情報の共有

**repetition** がなぜ承認の機能を持つのか、情報の共有という観点からもう少し深く考察を加えることにする。4 のあいづち型 **repetition** では、King の繰り返した言葉を再度ゲストが繰り返す現象が見られ、それは情報の共有を確認し合っているのだと考察した。

(9)の例では、ニューヨークの **Giuliani** 市長の前立腺ガンが発見された経緯をずっと聞いていた King が、ガンの宣告を受けたと市長が話したところで 'Like that' と言っている。それに対し **Giuliani** も 'Like that' と応じている。'Like that' が何を意味するかはコンテキストからしか解釈できない。すなわち 'Like that' には会話の当事者である King と **Giuliani** 以外の人には理解できないメタメッセージが含まれているといえる。二人が共有を確認した情報は、**Giuliani** のガンが発見されるに至った事実だけでなく、その間の **Giuliani** の心境も含めたメタ情報であるといえる。Ferrara (1994a,b) は **echoing** の機能を 'emphatic agreement' としたが、メタ情報の共有を承認するという意味では 'empathetic' だといえる。

- (9) **Giuliani**: So we went, and then I went to a series of other tests, and finally it was up again, and I had to take a biopsy, and the doctor called me back the next day after the biopsy, I was sitting in my office, mayor's office, and he said, "Several of the tests have come back as cancer."
- King**: Like that. ↘
- Giuliani**: Like that. ↘ So you take a deep breath, and he said, "I'll meet you at Gracie Mansion." ..... (続く) (LKL Aug.3,2000)

(10)は PSA テストを受けていなかったら、前立腺ガンが発見されず手遅れになる可能性があったと **Giuliani** が説明した後の二人のやり取りである。この二人の会話では、PSA テストは単なるガン検査ではなく、市長の生死を分けたテストとして象徴的な意味を持つ。King の 'No PSA' に対し、**Giuliani** が他の言い方をせずに 'No PSA' と繰り返しているのは、自分の話し方を相手に合わせ共感を高めようとするアコモデーションであり、また No PSA に含まれるメタ情報の共有を示すものだと考えられる。

- (10) **King**: So, no PSA, → this might not have been found. ↘
- Giuliani**: No PSA, → there were no symptoms. There was nothing, there was nothing but a blood test. (LKL Aug.3,2000)

このようなメタ情報の共有を示す **empathetic repetition** は、会話に携わる二人の心的距離が近い場合に出現すると推察される。本稿では、データの中に含めなかったが King のゲストである Donny と Marie 兄弟、或いは Ford 4 人兄弟といった親族間での会話に多く観

察された。

## 6. 結論

Ferrara (1994a,b)は mirroring、echoing がカウンセリング場面以外でも観察される可能性を示唆しているが、確かに本研究でも mirroring、echoing に相当する二つの repetition が観察された。本稿ではそれぞれの repetition の機能の特徴から、あいづち型、承認型として提議した。最後に、あいづち型、承認型それぞれの repetition の機能を整理し、Active Listening の仕組みを検証する。

Type 1 のあいづち型 repetition には、「聞いている」ことを示す機能と聞き役の理解を話し役に確かめる間接的確認要求の機能がある。話し役は聞き役の理解が間違っていたら訂正し、そうでなければ話を続けることで聞き役の理解があっていることを承認する。このようにして聞き役は自分の理解があっているかを「間接的」に確認できる。「聞いている」ことを示す機能と間接的確認要求の二つの機能を同時に行使できるという repetition の曖昧性が効果的な Active Listening を生むと考えられる。

Type 2 の承認型 repetition は、聞き役の提示した内容を「間接的」に承認するという働きを担っている。repetition はメタメッセージであり、情報の共有に重要な役割を果たしている。あいづち型、承認型 repetition の双方に共通する機能は「メタ情報の共有を示す」という働きである。

また 5.2.1 で検証したように、承認型 repetition が出現するのは King がゲストの話を要約、言い換えをして自分の理解を提示した時である。すなわち King の発話は広義の意味でゲストの話の repetition なのである。インタビュアーがゲストの話を要約して再提示することの役割について、Heritage (1985)はゲストに内容の確認を 'invite' するとしている。'immediate allo-repetition' という狭義の repetition でも、要約や言い換えという広義の repetition でも、聞き役が自分の理解の内容を提示すれば、話し役に間接的に確認要求ができる。狭義、広義を問わずあいづち型 repetition には、「聞いている」ことを示す機能と間接的に確認要求する機能があり、それ故に有効な Active Listening Device になるといえる。

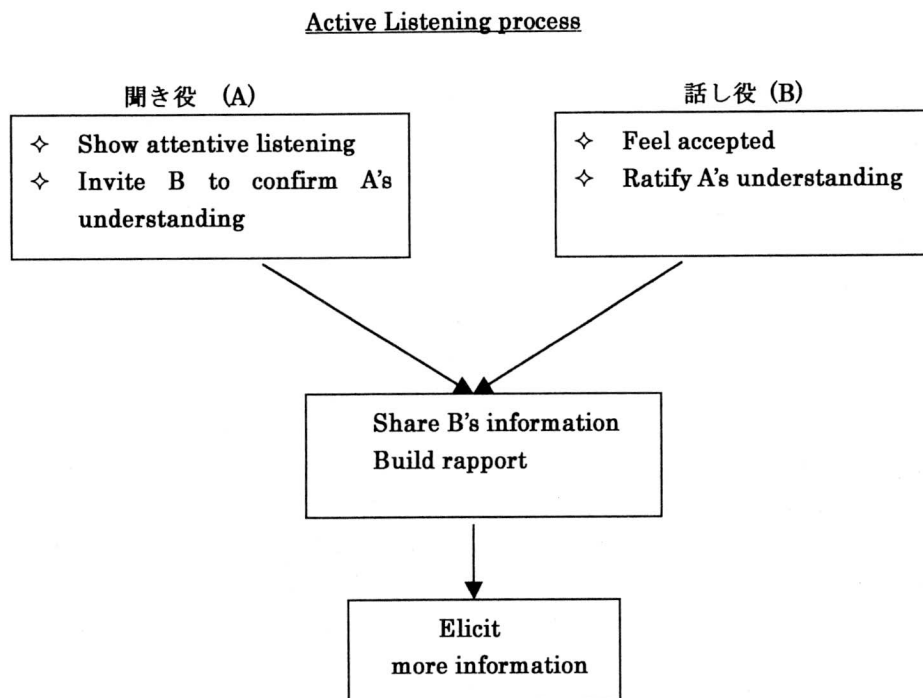
話し役、聞き役は情報の共有を確認することで、協調して会話を進めていこうという信頼関係が生まれる。聞き役が話を積極的に聞いている (Actively Listening) とわかって、話し役は安心して話を続けていくことになるのである。そのプロセスを図式化したものを、図 1 Active Listening Process として最後に示すことにする。

Active Listening は、あいづち型 repetition の持つ多機能を利用した効果的な聞き方であるといえる。4.2.3 で提議したように、repetition の「聞いている」ことを示す機能と間接的に確認要求する機能のバランスが Active Listening の効果に大きく関わっていると推察される。オウム返しでは Active Listening の効果が現れないことは、実践現場の報告にもある。Active Listening の原型ともいえる狭義のあいづち型 repetition でも長文の繰り返しは観察されなかった。また広義の repetition でも要約、或いはキーワードという圧縮された形で、相手の発話内容が再提示されている。repetition の二つの機能のバランスをうまくとるには、どのくらいの repetition の量が適量であるのかを調べるのが今後の課題である。(1) の Gordon (1970:62) の言葉にある 'nothing more, nothing less' の量が言語学的に解明されれば、Active Listening の実践に有効であると言えよう。



Active Listening の目的は、相手の立場にたつて話を聞き、相手が安心して話ができるような状況を作ることであり、「効果的な聞き方」を生む Active Listening Device は repetition に限られないと思われる。例えば Dinkmeyer and Losoncy (1996:62) は but ではなく and を使う方がいいという指摘をしている。今後ともこのような Active Listening Device を見つけ、その機能を言語学的に解明していけば、円滑なコミュニケーションを如何に実現するかという問いに答えることになるであろう。

図 1



\*本稿は日本英語コミュニケーション学会第10回年次大会(2001年10月13日:和歌山大学)における口頭原稿に加筆修正を加えたものである。発表の際に repetition とあいづちの関係について、会場の皆様より貴重なご意見を頂戴したことを心より感謝申し上げます。

## Corpus Data

CNN Larry King Live videos and rush transcripts

- aired on August 27, 1999 Donny and Marie Osmond Discuss Their Successful Daytime  
Talk Show and Their Lives in Show Business  
August 03, 2000 Ford Children Discuss Their Father's Stroke  
August 09, 2000 Do Cell Phones Cause Cancer?  
August 29, 2000 What is the Best Way to Combat Arthritis?  
January 04, 2002 With 'Politically Incorrect' Host Bill Maher

なお、rush transcripts は関西学院大学大学院言語コミュニケーション文化研究科、八木克正教授の LKL Corpus をお借りした。

## References

- Dinkmeyer, D. and Losoncy, L. 1996. *The Skills of Encouragement: Bringing Out the Best in Yourself and Others*. Florida: St. Lucie Press LLC.
- Duncan, S. Jr., and Fiske, D. W. 1977. *Face-to-face Interaction: Research, Methods, and Theory*. New Jersey: Lawrence Erlbaum Associates Publishers.
- Duncan, S. Jr., and Fiske, D. W. 1985. *Interaction Structure and Strategy*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Ferrara, K. 1994a. "Repetition as rejoinder in therapeutic discourse : echoing and mirroring." In Johnstone, B. (ed.), *Repetition in Discourse Interdisciplinary Perspectives, Volume Two*. 66-83. New Jersey: Alex Publishing Corporation.
- Ferrara, K. 1994b. *Therapeutic Ways with Words*. New York: Oxford University Press.
- Gordon, T. 1970. *Parent Effectiveness Training*. New York: Three River Press.
- Heritage, J. 1985. "Analyzing news interviews: aspects of the production of talk for an overhearing audience." In VanDijk, T. A. (ed.), *Handbook of Discourse Analysis, Vol.3. Discourse and Dialogue*. 95-117. London: Academic Press
- 堀口純子. 1997. 『日本語教育と会話分析』 東京:くろしお出版
- メイナード泉子.K. 1993. 『会話分析』 東京:くろしお出版
- 水谷信子. 1988. 「あいづち論」『日本語学』第7巻第13号
- Quirk, R., Greenbaum, S., Leech, G., and Svartvik, J. 1985. *A Comprehensive Grammar of the English Language*. 835-837. London: Longman.
- Tannen, D. 1989. *Talking Voices: Repetition, Dialogue, and Imagery in Conversational Discourse*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Yngve, V. 1970. "On Getting a Word in Edgewise." *Papers from the Sixth Regional Meeting of the Chicago Linguistics Society*. 567-577. Chicago: Chicago Linguistics Society.
- ザトラウスキー, P. 1993. 『日本語の談話の構造分析——勧誘のストラテジーの考察——』 東京:くろしお出版